

一日にして心が通い合う「奇跡」

－日本人の優しさの今に問い合わせるもの－

(映画『TOKYO タクシー』を観て)

豊中・山浦 純

「TOKYO タクシー」という映画は、見知らぬ他人同士が「一日にして心が通い合う優しさ」と「その優しさの限界」とを描いています。木村拓哉演ずる運転手・宇佐美浩二に二度にわたって「間違っていた」とラストで呟かせるシーンがそれを象徴しています。

(山田監督は、二人の出会いを「奇跡」として描いたと率直にその製作意図を述べておられます。)

朝鮮戦争後、北朝鮮の新しい国家建設の為に帰国する第一の恋人との別れ。一人取り残され、シングルマザーとして遺児を育てるしかなかったスミレ。

二番目の恋の相手は、スミレに暴力をふるうばかりか、目障りな前夫との遺児をも虐待し、その家庭内暴力（今で言うDV）に耐えかねて罪を犯してしまう。スミレは暴力を振るう男の身勝手な性欲を断罪する強さも合わせ持っていました。ここで想起されるのが、「スミレがまだ五歳の時に父が言問橋で東京大空襲に遭い死亡したことです。その為にその後のスミレの母もまたシングルマザーとしての生活を余儀なくされ、ささやかな居酒屋兼食堂を開いて、生活を繋いでいくしかなかった」ということです。そして、

最初の恋人の帰国による再会の叶わない、引き裂かれた別れ—北朝鮮向けの船が出航する場面で会話表示はないが、スミレらしき女性が恋人らしき男と一緒に連れて行ってくれと懇願するスミレに向かって激しく拒否している様なシーンがそれを暗示しています。

第2の恋人によるDVという暴力は、当時、誰にも理解されない問題であり、社会的にも孤独と孤立に堪えるしかなかったスミレ。ただ、DV問題との戦いはスミレ一人の戦いではなく、裁判のたびにスミレを支援する多くの女性たちが集っていた事であり、それは大きな一つの救いになっています。とはいえ、スミレが獄中にいる最中、最愛の息子がオートバイ事故により憤死してしまう悲劇に見舞われます。

それでも模範囚として刑期を短縮して出所したスミレは、犯罪者として彼女に向けられる冷たい視線を逃れるようニネイル・アーチストとして渡米し、自立した生活を送っています。無論、知人や友人などの伝手（生活の根っこ）を持たない孤独な生活であったであろうことも容易に想像ができます。そして、スミレは運転手への手紙の中で「私を『あんな罪を犯した女』として、近づいてくる男性は一人もいなかつたわ」と告白しています。この告白が、映画のラスト近くでスミレは若い運転手にあるかなきかの、そして人生最後の恋心を抱いていたのでは、と思わせるシーンに重なる重要な伏線になっています。

こうした悲惨な生涯が、ラストでスミレの残した「優しい運転手さんへ」という遺書と小切手に凝縮して表現される伏線でもあったのです。スミレには見知らぬ運転手にしかそれらを託す相手がいなかったのだ。そして、運転手の呟く「間違っていた」というセリフ。何故、老人ホームへの入所を一時でもお預けにして「最後にあのホテルへ行ってみたい」というスミレの願いを理解できなかったのか。そこに一日だけの優しさとその限界、スミレの壮絶な孤独に最後まで寄り添えなかつたという悔いが残りますが、それがまた逆に観客の共感を呼び、余韻として心に残る効果を生み出してもいます。

最後に『TOKYO タクシー』と『パリタクシー』とを少しだけ比較してみると、以下のような異同が見えてきます。

まずは、多くの人が気づかれる点かと思いますが、僅か2時間足らずの映画でありながら、一人の老女の壮絶で孤独な生涯を浮かび上がらせるに成功している構想力の素晴らしさです。これはもう原作の功績に帰するところ大であり、だからこそ山田監督もそれを踏襲しているのだとも思います。

第2に気づいたことは、老女の聞き役となる運転手の描き方が違っていた点です。両者ともに運転手もまた人生の悩みごとを抱えている点では共通しています。しかし、「パリタクシー」の方は、運転手は小さいころから「醜いアヒルの子」というコンプレックスがトラウマとなっている、多少、風変わりな人格の持ち主であるのに対して、「TOKYO タクシー」の運転手は、娘の進学と多額な入学金の算段に悩みながらも普通の市民として生活しているごく普通の人間として描かれている点です。そして実は、この「運転手をごく普通の市民として描くことがどんなに悩み深い人生であっても互いに思いやる優しさという絆でつながっていれば、市民はそれなりに生きていけるもの」、という山田監督のメッセージが素直に観客の心に届く点です。もし、観客が「生きる勇気を貰った」としたら、そんなメッセージが届いているということでもあるでしょう。

スミレが出所後、最初の、そして最後の優しさと少しでも長く一緒に時間を過ごしたかったという小さな願いがスミレの人生のフィナーレにとって、もっとも大切な願いであったことに運転手と共に観客も気づいたのではないでしょうか。

そして、エンドロールで流れる倍賞千恵子の歌声一多分、「とても静かな夜だから」一の若々しさが、同じく倍賞演じるスミレにも若々しくも輝かしい恋の瞬間と青春があった事を想起させて、切ないほどの感動を覚えました。

『パリタクシー』の方も車が街を流れていく映像と同時にシャンソンが流れていくのも如何にもパリの庶民の哀歎を感じさせて良かったと思います。

『国宝』のような重厚な長編傑作とは趣を異にしますが、短編小説としての味わいを堪能させてくれる名作ではなかったでしょうか。

(了)